

海外林業研究会々員の広場

プロジェクトが成功しないわけ (3) 原則は根拠を覆うことができるか

マングローブ情報センターで、地元の児童や学生、一般の訪問者に対してマングローブの効用を話す機会がある。マングローブは海風や波から家屋、畑地を守っています。陸地から土砂や汚染物質が海に流れ込むのを防いでいます。薪や炭、食料、染料、薬品など（の材料）を提供しています。様々な動物に棲家、餌場、繁殖場を提供します。加えて炭素を固定し酸素を供給しています。等々。これらの機能を家になぞらえて、壁の機能、キッチンの機能、育児室の機能、空調施設の機能などと言って説明し、「だからマングローブを保全しなければならないのです」と結論する。正直なところ、内心忸怩たるものがある。嘘やでまかせを言っているわけではないのだが、今どきマングローブを燃料として使っている地域など世界的に見れば限られているし、まして戦中戦後の食糧難の時代ではないのだから、敢えて *Bruguiera* の実や *Lumnitzera* の葉を好んで食べる人もいない。防風・防潮、土砂流入防止の「機能」だけを取り上げればマングローブの効果・効率が、護岸工等のそれらに較べて高いという科学的根拠を私はもっていない。生物多様性保全機能に至っては、どう言ったところで環境保全のトートロジーである。この辺を突いてくる人がいれば、少しまじめになって、実体はあるが根拠のない「稀少価値」などという言葉を持ち出して説明したりもする。「地球全体のマングローブを集めても、たとえば東カリマンタン州一州を埋め尽くすこともできないのです。トキがカラスに優れているのはその生存個体数が少ないことくらいですが、それが故に稀少であり、保全する意義があるのです」と。

相手が学生などある意味で現実の生活がマングローブから距離のある場合にはまだしも、相手が実際にマングローブの中や周辺に住んでいる人々となると、機能論法や希少価値論が無力であることは特に普及員でなくとも容易に想像できるだろう。マングローブが畑地を守ると言っても、マングローブを伐り拓かなければ畑地がない人たちをどう説得するか。マングローブの保全が他の土地利用に較べてどれだけ特定の個人に益をもたらすのか科学的なデータが示せなければ、よほど生活に余裕がある人でなければ話に耳を傾けてはくれない

だろう。マングローブを身近にしている人々ばかりではない。逆にマングローブから遠く離れている、前回の拙文にも登場した「最も客観的な、私的評価者」にも納得してもらえないだろう。「何のため?」、「誰のため?」この疑問に明快に答えられない限り。

確かに、ミクロ経済面から見れば、マングローブが最も効果的な土地利用であるとは、必ずしも言えない。住宅地や商業用地にした方が経済効率をはるかに高い場合がないとは言えない、はっきり言ってしまえば、少なくない。したがって、国際協力事業を経済効率・裨益効果の面から論ずれば、マングローブの復旧植林よりもマングローブを埋め立てて貧困層対象にした宅地造成の方が、あるいは、マングローブを利用したエコツーリズム開発よりも民活によるレジャーランド開発の方に分があると看做すを得ない。案件として「マングローブの保全」を選んだ時点で負け、あとは如何に失点を少なく抑えるかを考えながらプロジェクトを進めるしかない。プロジェクトが成功するか否かではなく、失敗が大きいのか小さいかで勝負をする。何とむなしなことだろう。

そうではない。

そもそも「保全」の大原則は、「最も経済効率の低いところを優先する」ではなかったか。経済効率が高いセクターはレッセ・フェールでやっていける、低いからこそ「保全」が必要であり、これを後押しする公共事業なり国際協力が必要なのである。現実に環境セクターの案件が増えている、あるいは重点が置かれるようになってきているところから判断すれば、この大原則は生きている。しかし、いざ評価の段になると、大原則は忘れ去られ、効果・効率を云々し、それを具体的に表すために(数字とは抽象の最たるものであることを忘れ)数値化し、受益者が特定できなくなり、わけがわからなくなってしまう。本当のところ、ミクロ経済面での効果の前に、自然資源を対象にした保全プロジェクトにはマクロ経済上の意義がある。さらに国家経済を超えてグローバルな視点からならば、世界中の研究者の尽力により、保全の効果の科学的データを示すことができる。しかし、この地方分権の時代、住民の視点を重視した事業が求められる時代、こういうことを胸を張って言うのには聊か抵抗がある。

結局のところ、「保全」のプロジェクトは、実施者だけではなく評価者が「保全」の大原則を受け入れない限り、成功しない。(羽鳥祐之)